

---

# スイッチ × 2 = 大変です...

ワト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイッチ×2 Ⅱ 大変です…

### 【Nコード】

N5290Z

### 【作者名】

ワト

### 【あらすじ】

高校の入学式当日に遅刻した俺、峰斗は生徒会長に捕まってしま  
う。さらに昔助けた女の子とその会長がいきなり彼女の立候補に…  
・ しかも2人共可愛いときた… これからどうなるんだ、俺

…

今日は高校の入学式…なのですが俺武原峰斗は只今絶賛遅刻中です、何故入学式に遅刻？と思うかもしれませんがそれは、あの時計のせいなんです…高校に受かったと同時に1人暮らしをはじめ毎日同じ時計のアラームで朝起きてたはずなのに今日に限ってあの糞時計ならなかったんです…だから只今俺は絶賛遅刻中なんです。

「その生徒、新入生だろ何故入学式の日から遅刻している？」  
うわぁ綺麗な人だなぁ…生徒会の腕章をつけているって事はこの生徒会の人なのかな？。

「何を黙っている？それにその前髪長くないか？入学式の日なんだからちゃんとしなやかッ！」

「えっすいません…じゃあ俺体育館に行きますんで」

「ちよつと待て前髪はどうするんだ？」

ああ前髪どうしようかな…今からじゃどうしようもないしとりあえずこのままで行こうかな。

「明日切ってくるんで今日は勘弁して下さい」

「いや今どうにかしないと、そっだッ！私が切つてやる」

「いっついえ結構です…それに髪切れるんですか？」

「大丈夫だ私に出来ない事はない、だからちよつとついてこい」

目の前にいる綺麗な人は、峰斗の腕を掴むとまだよくわからない学校の中を引つ張り生徒会室につくとドアを開けて入った。

「さぁ中に入れ、誰もいないからって変な気は起こすなよ？ただ前髪を切るだけなんだからな」

「起こしませんよ…早く前髪を切るなら切つて下さい」

「わかっている動くなよ？動いたら変になるからな」

峰斗が頷くのを確認すると、近くにあったハサミを取りだし前髪を切りはじめた…。

「あっあの切りすぎじゃないですか…？」

「大丈夫だこの位でちょうどいい!?!」

前髪を切り峰斗の顔が見えるようになる。急に顔を赤くしはじめた。

「急に顔を赤くしてどうしたんですか?もしかして風邪ですか」

「君の名前はなに?よかつたら教えてくれない?」

「おっ俺の名前ですか?俺は武原峰斗です」

「そっか武原峰斗か?彼女や好きな人はいるの?」

さつきからこの人おかしいような、それに雰囲気が変わった気がする……。

「いいいいんですけど……ってこんな話し俺が恥ずかしいだけじゃないですか」

「あっごめんね?彼女とか好きな人がいるのかなあって気になって……」

「いや謝らなくてもいいです……でもどうしてそんな事が気になるんですか?」

「それは……あのさ峰斗君に彼女がいらないなら私立候補していいかな?てかさせて下さいッ!」

立候補……?立候補!?!何で今日初めてあつた人がそんな事言うわけ?意味がわからない……。

「あっあの……俺は先輩の名前も知らないし、てか何も知らないんですけど」

「あっ忘れてた……えっと私は二年の立花美紀です、一応生徒会長です」

「立花先輩ですか……でも何で俺の彼女に立候補するんですか?」

「それは……言わなきゃ駄目かな?恥ずかしいんだけど……」

恥ずかしい、言いたくない、立候補……もしかして一目惚れ!?!

「理由がわからないと立候補はちよつと……」

「えっ……笑わないでね?私峰斗君に一目惚れしたの、だから立候補したいの」

「やっぱり俺が思ってた通りだったか……」

「でも立花先輩って綺麗だから彼氏いるんじゃないですか?それに

男子から人気そうだし」

「あのさ立花先輩って呼ばれるのいやかも…あと私彼氏なんてできた事ないよ？」

「本当にできた事ないんですか！？いそうなのに…名前は立花先輩以外なら何て呼ばれたいんですか？」

「本当にいないよ、いたら立候補何てしないし…名前は美紀って呼んでほしい」

美紀か…美紀先輩、美紀さんどっちで呼べばいいんだろ？

「あつても美紀に先輩とかさんとかつけないでね？呼び捨てで呼んでほしいの」

「でも歳上だし…それに生徒会長なんですよね？歳下の俺が呼び捨てにしたら周りの先輩達が…」

峰斗が顔をしかめながら言うと、美紀はああと理解したように頷いていた。

「だから呼び捨てにはできませんよ…美紀さんか美紀先輩ってなら呼べますけど」

「ううんじゃあ他の人がいるときはそれでいいけど、2人の時は美紀って呼んでくれる？」

「まあ2人になる事があれば…ってこんなゆつくり話してる場合じゃないんですよ、入学式始まるじゃないですか」

「あつそうだった…じゃあ早く髪切り終わらないとね」  
ハサミを前髪に近づけると凄く速さで切り終わった、そしてお礼を

言うと峰斗は、生徒会室から出て体育館に向かった。

「峰斗君かつこよかったなあ…私一目惚れ、いや男の子を好きになったの初めてかも」

「会長、そろそろ体育館に向かわないと入学式が始まりますよ」

「ああ由香か…わかった今すぐ向かう、入学式には遅れられないからな」

美紀はそう言うと体育館に向け歩き始めた、そして体育館では峰斗が席を探していた。

「席どこだよ…こんなに人が多かつたら見つからないよ」

「あつあのお…あなたの席多分私の席の隣だと思えます」

声のしたほうを見てみるとそこには、眼鏡をかけ髪を目までおろしたいかにも地味な女の子がいた。

「あつありがとう…ってだれ？知り合いじゃないよね？」

「私皆川ヒメっていいいます、多分同じクラスになると思う…とりあえず席につこうよ」

「そうだね…あつ俺武原峰斗っていうんだこれからよろしく」

「うんよろしく、じゃあ行こつかもうすぐ入学式始まるし」

峰斗は頷くと、前を向き歩き始めたヒメの後ろをついていった、そして席につくとすぐに入学式が始まり校長の話し、新入生代表の話し最後に生徒会長の話しが始まった。

「ねえ峰斗君、生徒会長の人綺麗だね、私とは大違い…」

まあ確かに綺麗なんだけど、さつきあんな事があつたからあんま直視できないんだよね…

「確かに綺麗だけど皆川さんだつて髪を上げて眼鏡をとれば…」

うそ！？まじで可愛いんだけど…髪を上げれば美紀さんと同レベルかもしれない…。

「ちよつちよつと峰斗君！？髪上げないで、私顔に自信がないからこんな風に隠してるのに…」

「それ本気で言ってる？本気で言ってるならそれは間違いだよ…」

「それどうゆう事？、もしかして私が思ってる以上に酷いの！？」  
まああるいみ酷いかも…こんな可愛い顔で自信がないとか他の女の子が聞いたら絶対怒る…。

「皆川さんが思ってるほうの反対、皆川さん自分じゃ顔に自信がないって言ってるけど、俺はそんな事ないと思うだつて普通に皆川さん可愛いもん」

「えっ！？私が可愛い…いやいや絶対にそんな事ないよ、もしかして峰斗君つてB選…？」

皆川さんを可愛いって言つてB選なら他の女の子なんてどうなるん

だろ…。

「おいその一年2人、話してないで私のいや生徒会長の話しをき…け!？」

あつ気づかれた、まあ俺は知らないフリをして無視するんだけど。

「皆川さんと話すの楽しいけど今は静かにしとこっか、あの生徒会長に怒られるし」

「そうだね、楽しいけど先輩に怒られるの怖いし静かにしてるよ」

2人は互いの顔を見ながら笑うと前を向き美紀の話聞き始めた、そして入学式が終わり教室に行こうと2人で廊下を歩いていると後ろから声をかけられ立ち止まった。

「おいお前達、さっき私の話を聞かずに話していた2人だな？」

「あつ生徒会長さん…峰斗君、どうしよう怒ってるのかな？」

「怒ってるように見えるけど…まあ別に大丈夫なんじゃない？」

ただ気になるのは、口調と雰囲気立候補するって言った時と全く違う事なんだよね…。

「何故私の話を聞かずに2人で話していたんだ？それとお前は武原を何で峰斗君って呼んでるんだ」

あれ峰斗君って呼んでたのに今武原って…何で？

「えつと友達だから？峰斗君と私って友達だよな？」

「まあ皆川さんがいいなら友達だね、今日初めて会ったばかりだけだ」

「じゃあ友達で、あれ？生徒会長さん何で峰斗君の名前知ってるの？知り合い？」

ここで知り合いって言ったらおかしいよな…普通入学したばかりの人が生徒会長と知り合い何てありえないし。

「私は武原の彼女候補だ、だから知り合い以上だな」

「ちよつと美紀さん!？こんなに人が多い所で何言ってるんですか」

「私は彼女候補じゃないのか…？私はてっきりもう彼女候補だと思ってた」

峰斗は、新入生や先輩達からの殺気がこもった視線を感じ焦ってい

た。

「ちょっと待って下さいッ！何で初めて会ったはずの生徒会長さんが彼女候補何ですか？」

ヒメが言った事に周りにいた男子達も頷いていた。

「それは、私が武原の彼女に立候補したからだ」

「って事は峰斗君に一目惚れしたって事ですよね？」

「まあそうなるな、それに一目惚れしたから彼女に立候補したんだ」

「じゃあ私も峰斗君の彼女に立候補しますッ！」

周りにいた男子も峰斗も美紀も急な展開に理解ができていなかった。

「峰斗君ごめん…私一回峰斗君に会った事あるんだ、覚えてないかもしれないけど…」

「俺と皆川さんが会った事あるの！？ごめん覚えてない…」

「私と峰斗君が会ったのは、去年の夏で男子に苛められてる所を助けてくれたの」

俺色んな人を助けてるからなあ…去年の夏だつて10人は助けました。叩かれたり悪口言われたりしてる私を男子達から守ってくれて、その後も色々優しくしてくれた」

「ごめん覚えてない…何かヒントがあれば思い出せるんだけど」

「じゃあポチつて言えば思い出す？」

ポチ…ポチ！？あのいつまでもついて来たから何となくポチつてあだ名をつけた女の子か…。

「思い出したみたいだね…私があの時峰斗君が助けてくれたポチです」

「まじでポチなの…？全然気づかなかった」

「へへへ、私は最初から気づいてたんだけど言い出せなくて」

でもあの時のポチが皆川さんであんなに可愛いなんて…。

「武原、話しについていけないんだか…結局こいつは知り合いなのか？」

「知り合いのポチです、今思い出しました…」

「知り合いじゃありません、私は峰斗君のペットのポチです」



ペットという言葉聞いて周りにいた人達も近くにいた峰斗や美紀も固まってしまった。

「ほらあの時峰斗君がお前、昔飼ってたペットみたいって言ったし」

「だからってペットはないんじゃない？俺ポチがペット何て言っていないよ」

「私になるって決めたからいいの、それに最初はペットかもしれないけどいつかは彼女になるんだから」

最初も何も人間のペット何ていらなないんだけど。。

「おいその男ッ！こんなか弱そうなの少女をペット扱いとは何様だ」

周りにいる野次馬を押し退け知らない男が峰斗の胸ぐらを掴んで大声で言った。

「お前誰だよ…それに俺はポチをペット扱いなんかしてねえ」

「僕はレディの憧れの的 高谷正樹だッ！」

「いや知らないし…それにレディの憧れの的って自分で言って恥ずかしくないの？」

「僕は本当の事を言っているだけだよ、それはこの美貌を見ればわかるだろ？」

美貌ってこいつ別にイケメンじゃないし…てか普通より下だ。

「とりあえず離してくれない？苦しいんだけど…」

「いや離さないよ、僕はこのか弱そうな少女がペット扱いされてるのが許せないからね」

「おい…峰斗君が離せて言ってるんだから、さっさと離しやがれッ！」

ポチが変わった！？チワワから土佐犬並みに変わった…。

「僕は君がペット扱いされないようにこの男と話しているんだよ、それとこれから君に近づかないように」

「誰がそんな事を頼んだ？むしろ私は峰斗君のペットでもいいから側にいたいんだよッ！」

「君の名前は何て言うんだい？僕は今から君の事を助けるんだから名前位聞いてもいいよね？」

こいつポチが言ってる事を全然聞いてない…。

「私の名前はポチだよ、峰斗君がポチってつけたんだからそれが私の名前だ」

「違うそれは君の本当の名前じゃないだろ？」

「私はポチだ峰斗君のペットのポチだッ！」

「だから君はこの男のペットじゃないんだよ…まさか洗脳しているのか!？」

うわぁこいつうざい…周りにいる人達も明らかに引いてるし。

「君がこの男のペットで側にいたいというのは洗脳されているからだ…よしッ！これからはずっと僕が君の側にいてあげる、だからこの男の事は忘れるんだ」

「私は峰斗君以外の人の側になんかいたくない、それにお前みたいなナルシストで上から目線の奴の側はもっといたくないッ！」

「僕の優しさがわからないとは…もういい穩便に済ませようと思っただがやめだ、今からこの男を叩きのめす」

胸ぐらを掴んでいた手を峰斗から離すとおもいつきり峰斗の顔を殴った。

「いつてえ…急に殴る事ないだろ？それにお前勘違いしすぎ」

「峰斗君の顔を殴った…もう許さない」

「それは私も同感だ、私の好きな人を殴る奴は許さん」

「生徒会長さん、あなたもこの男に洗脳されているのか…お前はそんなにレディを侍らせたいのか？最低の奴だな」

最低と言われた峰斗は一瞬キレそうになったが必死にキレるのを抑え我慢していた。

「君達2人もそうだ、洗脳されたからといってこんな最低の男を好きになるなんて…僕を好きになっていればよかったのに」

「ははは、お前どんだけ俺を悪く言えばいいんだよ…それに2人がお前の事を好きに？絶対にならねえよッ！」

峰斗が言った事に2人も頷いていた。

「それはこの美貌を見てから言っただけでほしいね、君より僕のほうが格好いいんだから2人も君より僕を好きになるはずさ」

「この中の下のナルシスト野郎が…お前友達いねえだろ？」

「最低な君に関係ないだろ、それに僕は女の子の憧れの的なんだよ」

「じゃあ周りにいる女子に聞いてみようぜ…こいつは周りにいる女子達の憧れの的がどうかをよ」

完全にキレた峰斗は正樹にそう言うのと近くにいた女子に聞き始めた。

「美紀やポチはこいつの事どう思う？憧れの的か？」

「そんなわけないだろ、私は武原以外の男には興味ないしな」

「私も峰斗君以外の男の人以外興味ない、それにあのナルシストはまず生理的に無理」

「そうだよなじゃあ他の人達はどうか、こいつは憧れの的か？」

大声で近くにいた人達に聞くと周りにいた人達は首を横に振ったり違うと叫んだり返事を返してくれた。

「どうだ、お前は憧れの的じゃないんだってよ…」

「ここにいる女子全員を洗脳したのか…君はどれだけ最低なんだ？君みたいな男は僕が絶対に叩きのめす」

正樹はそう言うと、峰斗に近づきまた顔を殴ろうとした…しかし完全にキレている峰斗はそれを避けると正樹の頭に回し蹴りを食らわせた。

「何回も殴らせるかよ…ってこいつ気絶してるし」

気絶しているとわかった峰斗は苦笑いしていた、そして周りにいる人達からは歓声が上がリ峰斗達の周りは騒がしくなっていた。

「こいつ口だけだったんだな…にしても勘違いしすぎだろ」

「峰斗君って強いんだね？助けてもらった時は殴られてただけだから知らなかった」

「まあ今回は特別で事で、普段はキレないから殴る事もないし」

「これは生徒会長として許してはいけない事だ…しかし今回はあいつが一方的に悪いから内緒にしておこう」

「それはどうも…っ…っていつまでもここで騒いでたら先生達が来るな…」  
さすがに騒ぎを聞きつけたのか先生達はもうこの場所に向かっていった。

「仕方ない…皆さんいい加減ここから逃げないと先生達が来ますよ、それじゃあ俺達は逃げるんで皆さんも逃げて下さいね」

峰斗は周りにいる人達に大声で叫ぶと美紀とポチの手を握って走り始めた。

第二話双子の姉& a m p・新しい友達登場(前書き)

2話投稿、駄文ですがこれからもよろしく

## 第二話双子の姉& a m p・新しい友達登場

峰斗はある程度逃げると美紀と別れポチと一緒に教室に向かっていた。

「あつ俺の席つてポチと近い？遠くなら話しにくいし…」

「峰斗君の席は私の隣だよ、それに峰斗君の席は窓側の一番後ろ」  
おっかなりいい席だ、それにポチと席が隣なのは嬉しいかも。

「それは最高だね、にしてもまだ教室につかないの？」

「もうすぐそこだよ、ほらあそこッ！早く行こうよ」

「そうだね、何かあのナルシストのせいで疲れたし椅子に座りたい」  
峰斗が小さい声で呟くとポチが峰斗の手を握り教室に向かって走り始めた、そして教室の前につくと手を離しドアを開けた。

「なあポチ、視線凄くないか？俺どこか変かな…」

「いやどこも変じゃないよ、多分さっきのを見てた人達が話してたのかも…」

ああだから男子は殺気がこもってる視線を俺に飛ばして、女子は意味がわからない視線を飛ばしてるのか…。

「おっさっきの回し蹴りの人やん、さっきのカッコよかつたばい」

「えつとだれ？クラスメイトっていうのは確か何だけどそれ以外知らない…」

「それはそうやし、だつて僕まだ自己紹介もしたらんけんね、僕の名前は宮下春つて言うんよ」

何か女の子みたいな名前だな、それに制服は男物だけど女の子にしか見えないし。

「俺は武原峰斗、気軽に峰斗つて呼んでいいから」

「峰斗か、じゃあ僕の事は春つて呼んでいいばい！じゃあこれからよろしく峰斗」

「ああよろしくな春、つて手小さいな女の子の手みたい」

握手した峰斗は春の手があまりにも小さいことに違和感を感じた。

「そんなわけないやん、女なら男物の制服きらんって」

「まあそれもそうか、じゃあポチ席に行こっか？」

峰斗が隣にいるポチに声をかけ自分の席に向かうとポチもその後をついていった。

「ここか…って春は前の席なのか？」

「そうみたいやね、なんか運命感じるばい」

「男にそんな事言われても嬉しくないって…」

「まあ確かにそれもそうやね、それに峰斗には2人も彼女候補がいるし」

春って最初から見てたんだ…なんか恥ずかしいかも。

「恥ずかしいから言わないでくれ…そしてポチはそんなに俺を見つめないで」

「峰斗君カツコいいなあって思ってたんだけど気づいてたんだ」

「だからそんな恥ずかしい事言つなよ…それに周りの男子からの視線が凄いいんだよ」

峰斗は気づいていないが視線を飛ばしているのは男子だけじゃなく、女子も飛ばしている。

「じゃあペットのポチがご主人様の顔を見てたって言うのは？」

「そつちのほう絶対駄目…」

「はは、2人は面白かねこれなら学校生活が楽しくなりそうばい」

「俺はこれが続くようなら学校に来なくなるかも知れないけど…」  
だって毎日この視線って耐えられそうにないし、多分教室を出ても

美紀のせいで色々ありそうだし。

「それは駄目ツ！峰斗君が来ないなら私が峰斗君を毎日迎えに行くから」

「それなら僕も迎えに行くよ、その為に家がどこか知る必要のあるね」

「峰斗君ってどこら辺に住んでるの？家族も一緒？」

「いや一人暮らしだよ、家は結構学校から近い、多分5分位しか離れてない」

峰斗が言った事に2人はにやけていた、そしてそれに気づいた峰斗は嫌な予感しかしていなかった。

「今日峰斗君の…」

「駄目、絶対に駄目ッ！どうせ今日俺の家に遊びに来るって言うんだろ？」

「正解ッ！つてことで今日峰斗の家に遊びに行つてよか？」

「だから駄目だつて…つて言つても2人ともついて来るんだろ？」

峰斗がそう言うと2人は満面の笑みで頷いた。

「はあ…じゃあ来てもいいけど荒らさないでね？」

「ええ…峰斗君のアルバム見ようと思つたのに」

「まあアルバム位なら見せるよ、あつても美紀には内緒な？」

美紀まできたら部屋が騒がしくなるし、ポチとケンカしそうだし…。

「うんわかつた…あつさっきのナルシスト男だ」

「本当だ…同じクラスだつたんだ何か頭が痛くなつてきた」

「峰斗、あの人凄い勢いで峰斗に近づいてくるよ」

春がいい終わった頃には、峰斗の目の前に来ていた…そして頭を抱えている峰斗の胸ぐらを掴むとまた顔を殴った。

「よくも僕に恥をかかせてくれたな…絶対に許さんぞ」

「また殴りやがったな…それに俺はお前に許してもらおう何て思つてねえよ」

「貴様に洗脳されている2人は必ず僕が助けて見せるッ！そして助けられた2人は僕に惚れるんだ」

うわあ…助けるならまだしも惚れるつてありえないだろ、その前にこいつ下心ありすぎ…。

「ねえ君…峰斗に迷惑かけるならどっかに行つてくれない？」

「君は誰だ？僕に話しかけていいのはレディだけだよ」

「ねえ峰斗、この人うざいね…イライラする」

確かにこのナルシストは見るだけでイライラする…。

「何で俺をそんなに目の敵にするわけ？俺お前に迷惑かけてないよね」



「それはレディをペット扱いしてる最低な男だからだ」

「じゃあどうすればお前は俺を目の敵にしなくなる？」

「それは君が洗脳している2人を僕に渡し、2人に一生近づかない事だ」

「それを決めるのは俺じゃなくてポチと美紀だ、2人がお前の所に行くなら俺は何も言わないけど、もし2人がお前の所に行きたくないって言ったらどうする？」

2人は絶対にこのナルシストの所には行かないと自信がある。

「もし僕じゃなく君を選んだなら僕はもう何もしない、まあ絶対に僕の所に来るんだけどね」

「じゃあとりあえずポチから聞こうぜ、ポチは俺とこのナルシストどっちがいい？」

「そんなの僕に決まっている、さあ早く最低男の洗脳から解放され僕の胸に飛び込んでくるんだ」

「誰があんたの胸に飛び込むか…飛び込むなら峰斗君の胸だよ」  
ポチは蔑んだような目で腕を広げている正樹を見ると、すぐに視線を峰斗にうつして胸に飛び込んだ。

「おおおい、恥ずかしいから離れるよ…」

「もうちよつと抱きついていたかったんだけど…」

「うっ嘘だッ！何故僕の胸に飛び込んでこない…わかった、また洗脳したんだな」

「もう君見るとイライラするんだよね…だからちよつと黙ってて？」

春が騒いでいる正樹に冷たく言うがそんな事は気にせず正樹は大声で叫んでいた。

「お前うるさい…ちよつと黙ってる」

峰斗は騒いでいる正樹に近づくと誰にも見られないようにしながら正樹の顎を殴った。

「ふうこれでしばらくは静かだ…とりあえずこいつはそこから辺に寝かせとくか」

「はい席について、HR始めるよとりあえず最初は自己紹介からね」

正樹を後ろのほうに寝かせるとドアから担任の先生が入ってきてそのままHRがはじまりクラス全員の自己紹介が始まった。

「私は担任の槇原です、じゃあ次の人」

自己紹介は順調に進みポチまで回ってきた。

「皆川ヒメです、峰斗君からはポチって呼ばれています」

ポチが自己紹介すると女子は、拍手したが男子は地味なポチに興味はないのか近くにいる人達と話していた。

「じゃあ次は僕、僕の名前は宮下春、中学までは九州のほうにおつてなまつとるけどよろしく」

春の次は俺か…何て言おうかな？。

「えつと武原峰斗です、一年間よろしく」

「はいッ！私武原君に質問があります」

「面倒じゃないのなら別にいいよ」

「武原君は彼女いますか？それとも好きな人」

この質問にクラスの女子ほとんどは峰斗が言う事に注目していた。

「彼女や好きな人はいないです、って恥ずかしいだけじゃん」

「じゃあ私にもチャンスがあるって事だ」

「駄目です、峰斗君は渡しませんッ！」

「ちよつとポチ！？いきなりそんな事言わないで」

にしても周りの男子、可哀想とか最悪とか地味な奴に好かれてもとか言ってるけどポチの素顔見たらどんな反応するんだろ…？

「ほらポチ座って、俺が恥ずかしいだけだから…」

「わかった…でも峰斗君は渡さないから」

「はいはい、とにかく座って…座らないと今日家に来させないよ？」

峰斗が冗談で言ってみるとポチは凄い勢いで椅子に座った。

「峰斗って女子から人気やね？まあ男子からは好かれそうにないけど…」

「女子に好かれても…男子の友達が欲しいよ」

「僕がおるやんツ！とりあえず男子の友達1号ばい」

「そっか春がいたな、でも春って女装したら女にしか見えなさそうだな…」

身長低いから、ロリにしかならないと思うけど…。

「今なんか失礼な事考えたやろ？」

「いや別に、ただ春が女装したら小学生にしか見えないうなっ  
て」

「かなり失礼やしツ！まあ僕は女装何てしないけどね」

文化祭の時に無理やり女装させてみようかな…。

「文化祭の時ば狙っても絶対にせんけんね」

「エスパーか！？まあそこまで嫌がるなら別にさせないけど」

「うん絶対にいやばい…とりあえずHRが終わるまで静かにしとか  
な」

「そうだな、このHR終われば今日は家に帰れるし」

ただ2人が家に来るから騒がしくなりそうだけど…あと美紀にバレ  
なきゃいいけど。

そしてHRは10分ほどで終わり、3人は帰る準備をしながら話  
していた。

「今から峰斗君の家に行くんだけどお昼ご飯どうする？」

「家に色々あるから俺が作ってやるよ、まあ俺の作る料理が口に合  
わなかったら適当に自分で作って」

「おお楽しみやね峰斗の料理、口に合わんでも全部食べるばい」

いや口に合わなかったら食べなくていいんだけど…まあその時はカ  
ツプラーメンでも出すか。

「この僕の口に君みたいな最低男が作った料理が合うわけないじゃ  
ないか」

こいついつ復活したんだ！？てか何か俺の家に来る気にいるし…。

「何でお前が俺の家に来るみたいな事言っただよ？言っとくけど  
お前は絶対に家の中に入らせないからな」

「なに！？僕を家にいれないだと…」

「ああ絶対に入れない、俺お前の事嫌いだし…てかナルシスト+上から目線の奴は生理的に無理」

峰斗が正樹に冷たく言つと、近くにいたポチと春は笑いをこらえていた。

「僕がせっかく君の家に行つてあげようと言っているのにそれを拒むとは…」

「ほらそれだよ、家に行つてあげよう？俺の家なんだから普通行つていい？だろ」

「なにが君の家だ、親の家の間違いじゃないのか？」

「残念俺は一人暮らしだし家賃も自分で払ってるから、親の家じゃなく俺の家なんだよ」

まあ仕送りで家賃払ってるからもしかしたら親の家かもしれないけど…。

「でも…くそつもう何も言えないじゃないか」

「それなら何も言つな、それとついてきても絶対に家の中には入らせないからな」

「これじゃあ2人を助けられないじゃないか」

「だから助けるも何も2人が望んで俺の彼女に立候補してるんだからお前は助ける必要がないんだよ」

正樹は峰斗が言つた事を聞かずに頭を抱えて悩んでいた。

「峰斗君、今の内に帰ろう？そのほうがこの人ついてこないし」

「早く峰斗のご飯食べたかしね」

「じゃあこいつは、放つといて俺の家に行くか」

2人が頷いたのを確認すると峰斗は頭を抱えている正樹にバレないように教室からでて校門に向かった。

「なあポチ、あそこ人ばかりできてないか？」

校門の近くまで来た峰斗達は人だかりのあるほうを見て話していた。

「だれか有名人でもいるのかな？有名人って言えば私モデルの沙織が好きなんだあ」

「へえ…沙織が好きなんだ確かにあいつ人気だしな」

「あいつ？もしかして峰斗君って沙織の事知ってるの？」

「えっ！？知るわけないじゃん、だって沙織って人気のモデルなんだよ？」

「うわぁ沙織が実は俺の双子の姉ちゃん何て言えねえ…。」

「そうだよ、てっきり同じ年だから中学校が一緒に友達なのかなあ思ったよ」

「沙織が行ってた中学校ってめちゃくちゃ遠くにあるんだから一緒に訳ないよ…」

「家族なんだから友達以上の関係なんだけど…。」

「じゃあちよつと見に行こうよ、誰がいるか気になるし」

「そうだな…じゃあ行くか、でもさっきから嫌な予感しかしてないんだよな…」

「3人は人だかりのほうに歩き出した、そして近づく度に峰斗の嫌な予感は強くなり、誰がいるかわかる場所まで近づくると峰斗の嫌な予感の中した。」

「峰斗君すごいよッ！生の沙織が目の中にいるよッ！」

「そうだね…生の沙織が目の中にいるね…」

「まさかあいつ入学式からいたとかじゃないよな？あいつも今日入学式のはずなんだけど…」

「なんか峰斗テンション低いばい？」

「ああ大丈夫とりあえず早く帰ろうぜ…」

「あのバカに見つからない内に…。」

「ええもうちよつと生沙織見ようよ…」

「じゃあ一人で見てていいよ、俺は興味ないから帰る」

「あつちよつと待ってよ、私も帰るう」

「人だかりの出来ている場所の横を通り抜け校門から出ようとしている峰斗の後ろをポチと春は、急いで追いかけていた。」

「痛っ…誰だよ俺はあいつに見つかる前に帰るんだよ」

「横を通り抜けながら歩いてきた峰斗は急に前に出てきて当たってしまった人に文句を言っていた。」

「ミイ君みいつけたッ！」

「俺をミイ君って呼ぶのはあのバカしかいない……」

目の前にいる人の顔を見るため倒れていた体を起こし、顔を上に向けてとそこには双子の姉、人気モデルがいた。

「お前がどうしてここにいるんだ……入学式のはずだろ」

「ミイ君に1ヶ月会えなかったから寂しくなつて来ちゃった……って事で久しぶりにチューを」

「誰がするかッ！それに久しぶりにチューってこの前のはお前が勝手にしてきたんだろ」

こいつが家族じゃなかったら喜べるんだけど、家族だからなあ……。

「勝手じゃないもん、将来結婚するんだから別に今してもいいんだもん」

「馬鹿美緒とは結婚できませんッ！他人でもしねえよ」

「他の人がいる所で本名言ったら駄目なんだよ？」

そんなの知らないし……俺にとってこいつは人気モデルの沙織じゃなく双子の姉の美緒だし。

「うるさい、お前の名前は美緒なんだから別に美緒って呼んでいいじゃねえか」

「仕方ない、将来の夫の頼みだから呼ばせてあげる」

おおいきなり上から視線……って美緒と話してる場合じゃないし、やっぱり視線が凄い事になつてる。

「でここに何しに来たわけ？人気モデルの沙織がこんな学校にいたら騒ぎになるんだけど」

「だから寂しくなつたからミイ君に会いに来たんだよ」

「じゃあその大荷物は何なんだ？まさか一緒に住むとか言わないよな？」

「そのまさかなのですッ！今日から一緒に住ませてもらいます」

まじかよ……あのババア何で許可だしたんだよ……。

「駄目です、今すぐ母さんのいる家に帰って下さい」

「了解です今から家に帰ります……って帰ったら駄目なんだよ、今日

からミイ君と2人で生活するんだから」

「お前沙織としてのキャラ崩壊してるけどいいの？周り見てみる」  
テレビでみる沙織の印象と違うのか周りにいる人達は困惑していた。  
「いいんだよ、どうせモデル何て遊びでやってるんだから」

「よくそれで人気モデルになったよな…他のモデルに聞かれたら殺されるぞ」

「その時はミイ君が助けしてくれるよッ！」

「うわぁ決定事項なんだ…って忘れてたけどポチ達が後ろにいるんだった。」

「とりあえず腕を絡めるな…俺今から友達と家に帰るんだよ」

「女の子？私のミイ君を奪う気なら許さないよ」

「お前の物じゃねえよ…じゃあとりあえず紹介、右がポチ、左が春だ」

理解できていない2人に気にせず峰斗は紹介した。

「この子地味ね…これならミイ君を奪われる心配はないね」

「人を外見だけで見ないほうがいいぞ…ポチちよつとこつちに来て固まったままのポチに声をかけると、驚きながらも峰斗の近くにきた。」

「他の人からは見ええないようにするから髪とメガネ外すね？」

「えっ！？自信ないから駄目だよ…」

「大丈夫、俺が可愛いって言ったら可愛いんだから自信持てッ！じやあ外すからな」

峰斗はそう言うのと、メガネを外し目の下まで伸びている髪を上上げ顔が見えるようにして美緒のほうに体を動かした。

「どうだ、人を外見で判断するもんじゃないだろ？」

「これは予想外だよ…モデルにもここまでの子いない」

「まあこれがポチの本当の姿だ、本人は自信がないから顔を見せないようにしてるみたいだけど」

「この子は危ないわね…油断したらミイ君を取られるかも」  
だから取られる前にお前の物じゃねえし…」

「ねえ峰斗君、さつき沙織とは知り合いじゃないって言ってたけどやっぱ知り合いなんじゃ…」

「こいつは知り合いじゃなくて双子の姉だ、だから家族だな…」

「峰斗君と沙織が双子で家族！？予想外だよ」

ポチが大声で言ったから周りの人達も驚いていた。

「最低男が人気モデルの沙織と家族だつて…嘘だツ！どうせまた洗脳したんだろ」

「お前いつからそこにいたんだよ…教室に置いてきたはずだろ？」

「人気モデルの沙織の大ファンとして生で見ない訳にはいかないだろ」

こいつ美緒の大ファンなんだ…あつ良いこと思いついた。

「なあナルシスト、俺がもし沙織にお前を紹介してやるって言ったらどうする？」

「紹介してくれるのか！？それならお前の親友になつてやるう」

いやこいつに親友になられても…でも紹介する事で付きまとわれなくなれば最高かも。

「いや親友はいいから付きまとうのやめてくれる？」

「そんな簡単な事でいいのか？それなら紹介してくれたら約束しよう」

「よしじゃあ今から紹介してやるよ…美緒こいつナルシスト男の」

「高谷正樹です、よかつたら僕の妻になつて下さい」

まさか紹介する前に話し出すとは…それも初対面の人にプロポーズとかありえない…。

「ミイ君、このブサイク君はミイ君のお友達？」

「いや全然、俺に付きまとうナルシスト男」

「なあんだお友達じゃないんだ…私ミイ君以外の男の人に話しかけられるの嫌いなんだ、それに妻？私はミイ君以外の人と結婚する何てありえないよ…」

「妻がいやなら彼女でもいいんだ、そこから愛を育んでもいいからね」



「ミイ君以外の男が私を口説こうと近づくなッ！」  
おお久しぶりに美緒の回し蹴りみたなあ…でも俺にパンツ見せながらやるのどうかと…見たかどうか確認してるし。

「峰斗君もこの人を回し蹴りで倒したけど沙織も回し蹴りで倒したね」

「そうだな、まあ双子だから一緒になつたんじゃない？」

「でも峰斗の回し蹴りより下手やったばい」

まああいつは蹴りより殴るほうが上手いからな。

「ミイ君、早くお家に帰ろうよ」

「そうだな…母さんには後で文句言うからとりあえず家に行くか」

「峰斗の料理楽しみばい」

「えっミイ君がお昼ご飯つくるの？」

ああ美緒は俺の料理食べた事あつたな…。

「峰斗君の料理つておいしくないんですか!？」

「大丈夫、僕は不味くても全部食べるばい」

「違うミイ君の料理は美味しいんだよ、だから楽しみだなあつて」

美緒が笑顔で2人に言うと、2人は安心したように笑顔になった。  
た。

「何だよ…2人は俺が料理できないように見えてたのかよ」

「峰斗君の料理してる姿を想像できなかったから…」

「ああシヨック、ポチがそんな事を思つてたなんて…」

「峰斗君冗談だよ大丈夫美味しくなくても美味しいって言うからッ！だから嫌わないで？」

ちよつと大袈裟に落ち込んだだけなんだけど…ポチって知らない人に騙されそうだな。

「だからミイ君の料理は美味しいんだつて」

「はいはい、じゃあ家に行くよ？皆ついてきてね？」

「はあいッ！ちゃんと峰斗君のあとについて行きます」

「峰斗のご飯楽しみばい」

「春はさつきからそれしか言っていないよ？」

そんなにお腹空いてるのかな？じゃあ早く帰って急いで昼飯作らな  
いと。

「ほらミイ君、早く行くよ」

「ちよつと美緒、手握るなよ恥ずかしいだろ」

「あつずるいッ！じゃあ私も峰斗君と手つなぐう」

「あつポチまで…ちよつと離せよ恥ずかしいだろ」

峰斗が言った事に2人は耳も貸さず家に向かってあるきはじめた。

あれ美緒とポチって家しらないよね…？

「大丈夫お母さんに聞いてきたから」

「エスパーか！？って何かさつきも言ったなこれ…じゃあ家までよ  
ろしく」

「任せて、ミイ君はちゃんと家まで連れていくから」

美緒はそう言つと、一緒に歩いていたらポチとアイコンタクトをして  
一気に峰斗を家に向かって引きずりだした。

到着しちょっとした春の秘密？（前書き）

かなり遅くなりました・・・  
まあ次もがんばります

## 到着！ちょっとした春の秘密？

引きずられながら家に帰ってきた峰斗は4人分のお昼ご飯を作っていた。

「何か食べたい物ある？作れる物なら作るけど」

「ミイ君が作ってくれるものならなんでもいいよ、それに愛情がこもってれば最高だね」

「とりあえず黙って？ポチと春は何が食べた…い！？」

キッチンに立って料理を作っていた峰斗は、目の前の状況に言葉を失った。

「2人はなにしてるのかな…？」

「峰斗君の恥ずかしい秘密を探してるんだよ、それにエツチな本と  
かありそうだし」

うんポチのお昼ご飯にイタズラしてやるうツ！

「で春は俺のパンツになにしてるの…そんなに俺のパンツは珍しい  
かな？」

「いやあ男の子のパンツってこつやつたとかあって思ってた…」

「春も男の子だよな？つてもういいや…2人ともご飯ができるまで  
に片付けてなかったらお昼抜きだから」

まあ本当にお昼抜きにはしないんだけどね、とりあえずこつ言わな  
いと片付けなさそうだし…。

そして一時間後お昼ご飯を作り終わった峰斗は3人がいる部屋に料理を運んでいた。

「ちゃんと片付けてるね、でも片付けかたが適当な気がする…」

「そんな事ないよ…峰斗君が置いてた所にちゃんと片付けたもん」  
「そうばい、ちゃんと峰斗のパンツあつた場所に直したし」

「うんもう面倒だからいいや…とりあえず座つて？今持つて来てるので最後だから」

峰斗が3人に言いながら最後の料理を置くと3人は、目の前に置かれていた料理を見て目を輝かせていた。

「これ本当に峰斗君が作ったの？冷凍食品とか昨日のご飯の残り物とかそんなんじゃないの？」

「失敬な…ちゃんと作ったよ、そんなに俺が料理できないように見えるのかよ」

「ミイ君は料理作らないように見えるからねえ、まあ見えるだけで本当は普通に作れるんだけどね」

美緒のご飯無しにしようかなあ…うんそれがいいねツ！

「駄目だよお昼抜いたらミイ君との大人のスポーツができなくなるから」

「エスパーか！？つてもうこれ飽きたからやめよう…それと絶対にしないからな？」

「ええ何でえ！？私ミイ君に初めてをもらつて貰う為に誰ともしたくないんだよ…まあミイ君以外とする気なんてないんだけどね」

「美緒は、俺とどんな関係になりたいんだよ！？」

この返答しだいでは部屋に鍵をつけよう…俺の貞操を守る為に。

「それは恋人？いやお嫁さんかな、それで毎日ミイ君と大人のスポーツを…へへへ」

アウトおツ！絶対部屋に鍵かけよう…。

「じゃあ美緒はご飯抜きということで、それ以外の人はたべようか？」

「うんツ！もうお腹空いて倒れそうなんだよう…」

「僕もお腹空いて力がでない…」

「じゃあたべようか、とりあえず嫌いな物があつたら食べなくていいから」

峰斗がそう言うと同時に3人は目の前に並べてあるサンドイッチやそれ以外の料理を食べ始めた。

「ねえ峰斗、僕が食べんやっただぶん家に持って帰ってよか？」

「別にいいけど、でも急にどうしたんだ？さっきまであんなにお腹空いたって言うってたのに全然食べてないし」

峰斗の言う通り春は、目の前に並んでいるサンドイッチを2つしか食べていないのだ。

「いやあ僕だけこんな料理食べて家に帰ったら妹達に悪かと思って…」

ははは、と笑いながら春は言っているがその表情は悲しさ半分妹達に申し訳なさ半分って感じの顔をしていた。

「なあ美緒、今日皆で入学祝いのパーティーしないか？」

「あつミイ君の顔がこんなに近くについていきなりどうしたの？」

2人は顔をかなり近く近くして他の2人には聞こえないように話していた、そしてそれを見たポチは顔を引きつらせながらどす黒いオーラを出していた。

「いやなんか春のあの顔見てたらなんかしてやれないかなあって思ってたさ…」

「でも春君はそれを望んでないかもよ？それでもいいの？」

「それなら普通のパーティーをするから来てくれって言えばいいだろ？」

美緒はしばらく考えると頷きながら話し始めた。

「今日春君と、ポチちゃんは夜暇？」

「暇だよ？でも急にそんな事聞いてどうしたの？」

「僕も暇ばい、今日は特に用事なかし」

それを聞いた美緒は峰斗を見て頷き頷き返した峰斗は急にその場に立ち上がった。

「じゃあ今日は、皆で入学祝いのパーティーをしまあすッ！」

「やったあッ！パーティーだ、でも今日にどうしたの？」

「いや新しい友達も出来たしポチにもまた会えたし、それに今日入

学したしちょうどいいかなあつて思つて」

まあ春のこともあるからなんだけどそれは内緒つてことで。

「ちよつと待つて、もしかして僕に同情してそんな事言いよると？  
それならツ！？」

何か言おうとした春の唇に峰斗は人差し指を当てて遮つた、そして耳元で他の人から聞こえないように何か呟くと春の顔は真つ赤になりコクコクと峰斗が何かを言つたたびに頷いていた。

「まさかミイ君が男の子を墮とすとは…」

「天然ジゴロだね…はあ何人ライバルが増えるんだらう？」

「さつご飯の続き食べようか？つてなんで呆れたような目で俺を見るんだよ！？」

春に何かを言い終わつた峰斗が視線を感じて2人を見てみると2人は溜め息をつきながら自分の事を見ているのに気づき狼狽えていた。

「はあミイ君は自分が何をしたかわかつてないみたいだね…」

「そう例えば一人の男の子を墮としたとかね？峰斗君は何人ライバルを増やすんだらうね…」

「意味わかんないから…ほら早くご飯たべようよ、春も遠慮せずに食べよ？」

「ひやつひゃい！？」

急に話を振られた春は顔を真つ赤にしながら変な声を出していた…。

「なんだよそんなへんな声出して…まあいいやとりあえず食べよ」

そして一時間後にご飯を食べ終わりポチと春の2人は玄関で帰る準備を始めていた。

「じゃあ夜の入学祝いのパーティーの時にな？」

「うんツ！じゃあまたパーティーの時に会おうね」

「まっまた夜にね？あとご飯美味しかったばい」

「それは良かった、じゃあまた夜なツ！あと春は妹達も連れてきていいからな？もちろんお母さんも」

顔を真つ赤にしながら頷くと鞆を持って春は玄関からとびだした。

「あつ春君先に行つちやた…じゃあバイバイツ！」

ポチもそういうと春を追いかける為に玄関からとびだしていった。

「さっ夜のパーティーの為に買い物に行きますか、勿論お金は人気モデルの沙織さんにお金を出してもらって」

「お金を出すのはいいけど条件がありますッ！」

「なっなんだよ…俺のできる範囲でなら別にいいけど」

「条件は私の唇にキスをやる事ですッ！」

「こっこれは定番のギャグをする時なんじゃ…。」

「わかったじゃあ目を瞑ってくれ恥ずかしいから」

「えっ本当にしてくれるの！？やっ私の初めてをミイ君がもらってくれるんだね」

目の前にいる美緒が目を瞑ったのを確認すると峰斗は美緒にバレないようにキツチンにある冷蔵庫から必要な物を取り出して美緒の目の前に戻った。

「行くぞ？やるからな…」

ああ私とミイ君がキスしてるう、でも何か生臭い…何でだろう？

恐る恐る目を開けてみるとそこには峰斗の顔じゃなく魚のキスが自分の唇にキスをしていた。

「ミイ君、これはどういう事かな…？」

「えっ魚のキスだけど？だって唇にキスをやってってくれって言ったから」

「ははは、私の初めては魚のキスなんだ…ははは」

美緒はよほどショックだったのか部屋の隅に座り込んでしまった。

「美緒そんなに落ち込むなッ！それに初めては母さんか父さんだと思っぞ？って待てこの前美緒にキスされたぞ！？って事は初めてじゃないじゃん…」

「違うう好きな人からキスされるのは初めてなの…まあ私からだったら毎日してたんだけど」

「ちよつと待て毎日してたんだけどだって？それは初耳だなどうゆう事が説明して「さあ早くパーティーに必要な物を買に行こうッ！」おい待てッ！」



美緒は、逃げるように外に出て行ってしまった…。

「財布も持たずにどうやって買い物するんだよ…まあしょうがないから財布持って美緒を追いかけるか」

その頃春は、妹達と母親をリビングに集めて自分の前に座らせていた。

「春、何で皆を集めたのかしら？ご飯作らないといけないから忙しいんだけど」

「今日のご飯作らなくていいばい」

「春、夕飯を作らないでいいってあなたは私達に空腹のまま夜を過ごせと言うのかしら…？」

母親が言う事に妹達は、親の仇を見るような殺気がこもった目で春を睨んでいた。

「ちっ違つツ！夜ついてきてほしか所のあるったい」

「空腹のまま私達を歩かせるの？春はいつからDSの鬼畜になったのかしら？」

「だから違つって言いよるやん…とりあえず夕飯は作らなくていいから」

「まあそこまで言うなら作らないわ…何か理由がありそうだし」

その頃ポチはと言つと…

「あらあヒメ今日はご機嫌ねえ？もしかして探してた王子様が見つかったとかあ？たしかヒメの事をポチって呼んでいたのよね」

「うん同じ高校の同じクラスになって席も隣どうしなのツ！それに今日の夜パーティーに呼ばれてるの」

「あらあら適当に言ったのに正解しちゃった、でもそれならメイも行きたがるんじゃないかしら？」

メイはヒメの一つ上の姉で同じ高校に行っている、それにヒメも峰斗に助けられたがメイも峰斗に助けられていて姉妹で峰斗の事を探していたのだ。

「ああお姉ちゃんか…内緒で行きたいんだけどなあ」

「私に何を内緒にして行くのかな？」

「いついやちよつとコンビニに行つてこようかなつて思つて」

「違うでしょヒメ？王子様が見つかったのよメイとヒメが探していた王子様がね、それでヒメは王子様にパーティーに呼ばれたんだつて」

「ふうん…見つかった上に家にお呼ばれねえ」

ああどうしてお母さんはお姉ちゃんに言つちやうのよ…せつかくバしずに行けると思つてたのに。

「でも残念今日は宿題がたまつてて行けないの…ああ早く私の王子様に会いたいのに」

「峰斗君はお姉ちゃんの物じゃないよツ！それに強敵がいるんだから」

「その強敵って誰なの？私の知ってる人？」

ふふ、お姉ちゃんにこれを言えばびっくりして変な顔になるかも…  
うん言おうツ！。

「お姉ちゃんが一番好きなモデルさんって誰？」

「いきなり何よ？まあ好きなモデルは沙織よつて知ってるでしょ？」

「うん知ってるよ、まだ気づかないの？ここまで言えばわかると思

うんだけど…」

「まさか…でもそれじゃあ勝ち目が無いよ？何でヒメはそんなに余裕なのよ？」

それは沙織は峰斗君の家族だからなんだけど絶対にお姉ちゃんには教えないッ！

「まあ私はお姉ちゃんより色々知ってるから、まっ王子様は同じ高校に通ってるから探してみるといいよ、明日にでも一年生の教室を覗いてみれば？」

「一年生なのね？絶対に明日の内に探しだすよ、じゃあ私は明日の為に宿題をやっつけてきますッ！」

「じゃあ私は夜まで色々準備してこようかな？」

はあどんな服着て行こうかなあ…峰斗君に可愛いつて思われるような服ってあったかな？まあちゃんとした服着ればいいよね？はあ夜が楽しみ

#### 第四話 パーティー〜春の秘密と理性崩壊？（前書き）

ちよつとエロくなつちやいました・・・  
でも大丈夫いつもと変わらず駄文です！  
後時々でいいので感想ほしいかもです。

#### 第四話 パーティー〜春の秘密と理性崩壊？

ピンポン、ピンポン

呼び出し音が部屋の中に響く。

「あつミイ君来たみたいだよ、ヒメちゃんかな？それとも春君？」

「まあ玄関に行けばわかるさ、もしかしたら2人一緒かもしれないし」

「じゃあ賭けようよ、私はヒメちゃんだけ来てると思う！」

「じゃあ俺は2人+春の家族で、早く行こうぜ」

美緒と峰斗は、2人で玄関に向かった。

「よっしゃッ！俺の勝ちだな、そして美緒の負け」

勝ち誇ったように言うのと美緒は頬を膨らまして拗ねていた。

「峰斗君こんばんは、ただいまポチ参上いたしました」

「えつとこんばんは、僕と僕の家族も一緒に来たばい」

ポチは笑顔で敬礼しながら春は顔を赤くしながら挨拶してきた。

「こんばんは、春の家族の方は初めまして春の友達の武原峰斗です」

第一印象をよくする為に120%の笑顔で挨拶をする。

「ああ久しぶりにミイ君の120%の笑顔を見たよ、そしてこの笑顔を見たら……」

「ほらお母さん峰斗に挨拶せないかんばい？」

「へっ？あつああ私春の母親で桜って言います、桜って呼んで下さいね？」

「はいじゃあ桜さん立ち話もなんですから中に入って下さい、そこに隠れてる2人もね」

峰斗がそう言うのと玄関のドアの近くから2人の女の子が出てきた。

「こんばんは、俺の名前は峰斗2人の名前は何て言うの？」

ここでも怖がられないように120%の笑顔で自己紹介をする。

「みつ美晴です中学三年生です、よよよよろしくお願いしますッ」

「うんよろしくね!」

美晴の頭に手を起き撫でると顔が真っ赤になっていきふらふらと自分の母親のほうに倒れてしまった。

「ありや大丈夫?じゃあ君の名前は何ていうの?」

「わっ私は夏紀です中学一年生です、よっよろしくねお兄ちゃん」

「おっお兄ちゃん!」

やっやばい可愛い女の子からお兄ちゃん何て死ぬッ…。

「ミイ君大丈夫?まさかお兄ちゃんって呼ばれただけでこんなになるなんて…」

美緒の前には体を震わせながら立っている峰斗がいる。

「えっ?なっ何で人気モデルの沙織がここにいるの!」

今頃美緒の事に気づいた美晴が大声で叫んでいた。

「ミイ君の妻の武原美緒です、よろしくね美晴ちゃん」

「つつ妻何ですか!?そっそくだよね峰斗さんカツコいいもんね中学の男子じゃあ足元にも及ばないくらい…」

「なにが妻だ、ごめんね美晴ちゃんこいつは双子の姉の美緒妻じゃないから」

「そっそっなんですか?よかつたあ…」

「じゃあどうぞ中に入って下さい狭いかもしれませんが」

峰斗が玄関で立っている5人に言うと5人は靴を脱いで中に入った。

「さっ美緒も突っ立てないで行こうぜ、ほとんど料理は出来てるけどもうちよい作らなきゃいけないし」

「この天然ジゴロのたらしミイ君…」

「意味がわからん…ほら行くぞ」

美緒の手を掴んでリビングに行くところにはテーブルに並んでいる料理を見て驚いている5人がいた。

「あっあのどうしたんですか?そんなに俺が作った料理がおかしいですか?」

「えっ峰斗君が作ったの!」

「まあ一応この家に料理作れるのは俺しかいないんで」

「峰斗君って凄いのねッ！でも何かショックかも…」そう言いながらもどこか嬉しそうな春の母親を見て皆は笑っていた。

「じゃあ俺もうちよい作るのあるんで適当にくつろいでてください」

「あつ私も手伝わよまあ峰斗君みたいに上手くはないけど…」

「ありがとうございます、じゃあ桜さんはサラダ作ってもらえます？」

「任せなさい、サラダなら余裕よ」

2人は笑いながらキッチンに行ってしまった。

「ねえ春君、まさかとは思うけどお母さん…」

「多分そのまさかだと思う…お父さんがいなくなつて男の人に関わらなくなつとつたのに」

「はあ…まさか友達のお親までとはね、ねえちよつと見に行かない？なんか嫌な予感がするんだよね」

「嫌な予感？まあそんなに気になるなら行つてみようか」

そう言つて5人は、峰斗と春の母親がいるキッチンに向かった。

「ううんやっぱり近づくに連れて嫌な予感が強くなつてる…」

「とりあえず静かに覗いてみようよ」

「そうばい、じゃあ先に僕から見てみる…ばい！？」

「ちよつとどうしたの？」

「いっいやちよつと僕の口からは言いにくかとけど…」

「ちよつと私にもミイ君を見せて」

美緒がドアの前にいる春をどけてキッチンの中を覗いてみるとそこには春の母親を抱きしめながら耳元で囁いている峰斗と顔を真っ赤にしながら頷いている桜がいた。

「ななな、何でえ！？何でミイ君が春のお母さんを抱きしめてるの？」

「えっ！？ちよつと私にも見せてッ！」

その後ポチと美晴それから夏紀もキッチンを覗くと皆同じ反応で叫んでいた。

「ちょっと私やめさせてくるッ！」

「私も行くッ！ていうかもう全員で行こうよ」

ポチがそう言つと皆頷きキッチンに入つていった。

「ちよつとミイ君ッ！何で春君のお母さんを抱きしめてるのよ、抱きしめるなら私を抱きしめなさいッ！」

「それが嫌なら私でもいいんだよ？峰斗君のペットだしね」

「峰斗さんなら私抱かれてもいいですッ！あっ…抱かれてってゆうのは抱きしめるって事ですよ」

「私もいいよお兄ちゃんならいくらでも抱きしめていいよ？」

いきなり入つてきて意味がわからない事を言う4人に峰斗は困惑していた。

「…さあどうぞッ！いつでも抱きしめていいよ」「」「」

そう言いながら両手を広げて峰斗に抱きしめられるのをまつ4人。

「いや抱きしめないよ？それに皆勘違いしてるけど俺桜さんに野菜の切り方教えてただけだから」

「本当に私達の勘違い？うわぁ恥ずかしい…」

「ほらわかつたならキッチンから出て行って」

峰斗が顔を赤くして俯いている4人に言つと逃げるようにキッチンから出て行った

「さっ作りましようか、って顔が赤いけど大丈夫ですか？」

「だっ大丈夫よ、早く作りましよう皆お腹空いてるでしょうし」

「できたよって何してんの！？」

「ミイ君の部屋を物色してたら元カノの写真が出てきたから皆で見



てたの」

「えっ？全部捨てたはずなのに何でまだ残ってたんだよ…」

「まあ別にいいけど、でも何で彼女いたの隠してたのかな？」

どす黒いオーラを出しながら近づいてくる4人に顔をひきつらせながら後ろに下がる峰斗。

「春ッ！助けてくれ、助けてくれたら何でも聞いてやるから」

「本当に聞いてくれるん？」

「絶対に聞くから早く助けてくれッ！」

春は頷くとすぐに峰斗と4人の間に立って両手を広げた。

「皆いい加減やめんばい？それにお腹空いたし」

「それもそうね、とりあえずやめてあげる…」

「とりあえずじゃんけんしまししょうか？峰斗君の隣に座れる権利をとるために」

「私は絶対に勝つわよ？じゃあやりましようか」

じゃんけんの結果峰斗の隣に座る権利をとったのはポチに決まった。

「やったッ！峰斗君の隣に座れるう」

「まあ今回は譲ってあげる…あつ1人座る場所がないわね」

「そうだね…じゃあ美緒は立ったまま食べるということ」

「えっ！？ミイ君がひどい…」

「嘘だよ、そうだッ！夏紀ちゃんちょっとこっちに来て」

峰斗は、夏紀が近くに来ると夏紀を抱えて自分の足の中に座らせた。

「へっ？おおおおお兄ちゃん！？」

「座る場所がないならこれで座れるじゃん？」

「羨ましい…私もミイ君の足の中に座りたいッ！」

「私も座りたいです…夏紀私と変わってくれない？」

夏紀は首を横に降って変わるのを拒むと峰斗に体をあずけた。

「夏紀ちゃん恐ろしい子ッ！」

「ねえ結局今日は何をする為に集まったの？私は春についてくるよ  
うに言われてきたから知らないのよね」

「今日は入学祝いのパーティーですよ」

「えっそうなの！？じゃあ後でお金を渡さない」と

峰斗は首を横に降りながら話しはじめた。

「お金はいりませんよ？俺達が勝手にやってるパーティーに皆を呼んだだけですから」

「でもそれじゃあ何か悪い用な気がして」

「じゃあ今度桜さんの作った料理を食べさせて下さい、それで今日のほうがいいですから」

満面の笑みで言う峰斗に少し見とれてしまった桜だが我にかえって渋々ながらも頷いた。

「ほら食べましょうっ！皆もお腹空いてるだろうし」「そうね、じゃあ今日はご馳走になります」

「じゃあいただきますッ！」

峰斗は自分が作った料理を皆がどう思うか見ていたが美味しそうに食べるのを見て安心した。

「はあ何かクラクラする…まさか美緒の奴酒でも買って出してたのか？」

峰斗は自分の部屋にもう一つ布団を敷きながら一人呟いていた。

コンコン

「僕も手伝うばい？それに僕以外寝ちゃって暇やし」

「そうなのか？やっぱり酒でも混ぜってたのかな…春はクラクラしたりしてないのか？」

「うん、僕はお酒強いから飲んでも大丈夫やし」

「そつかじゃあとりあえず布団は全部敷いたから皆を空いてる部屋に連れて行く…」

そして10分後寝ている5人を布団まで1人ずつ連れて行き春と一緒に自分の部屋に戻った。

「ねえ何でもお願い聞いてくれるって言ったの覚えとる？」

「ああ覚えてるよ、でも俺ができる範囲で許してくれよ？」

「うん、じゃあちよつと後ろ向いててくれん？」

「何するんだ？まあとりあえず後ろ向いとくよ」

後ろを向いてすぐに服を脱ぐような音が聞こえてきて音がしなくなつたと思つと後ろから抱きつかれた。

「おっおい？何してんだよ！？」

「僕からのお願いは僕の初めてを貰ってほしいんだ…」

「俺に男とやるなんて趣味はないぞ！？それに今日会つたばかりで何でそうなるんだよ？」

「僕が峰斗の事を好きだからに決まつとるやん、あのナルシストに回し蹴りした時に初めて峰斗の事を見てからずっと胸がドキドキしとるんよ」

「とりあえず服を着てくれ…話しはそれからだ！？」

後ろを向いて春を見るとそこにいたのは胸にサラシをまいてる春がいた。

「何でサラシをまいてるんだ？それにお前ついてない…」

「僕男の子が苦手でわざと男の子の格好してるんだよ…僕いや私は真正正銘の女の子ばい」

「マジか…春は女の子だったのか、まあ別に女の子って言われても信じちまうような可愛い顔してるしな」

「うん、だからさッ！私の初めて貰って欲しいっちゃん」

春は峰斗をベッドに押し倒して馬乗りになった。

「私ねサラシを巻かないといけない位胸が大きいんだ…峰斗は胸が大きい子は嫌い？」

「いや好きだけど…ちよつと待っててくれってサラシをとるなッ！」

やつヤバい理性がいつ崩壊してもおかしくないぞ…それも春から甘い匂いがするしお酒も飲んでみたいからマジでヤバい。

「どうかな私の胸峰斗の好みかな？それともやっぱり大きい？」

春の胸Eは絶対にあるって何真面目に見てるんだよ…本当に理性が崩壊しちまう。

「ねえ峰斗、私の初めて貰って？本当に好きなんよ」

「だから今日初めて会ったばかりなのにこんな事は、んぐ!？」

峰斗が全部言い終わる前に春の唇で止められてしまった、そしてその時ギリギリ保っていた峰斗の理性が音を立てながら崩れた。

「本当にいいんだなと、春のせいで理性が音を立てながら崩れたよ」

理性を保てなくなった峰斗は自分の体に馬乗りになっている春を自分が上にくるようにベッドに押し倒した。

「うんいいばい、私の体と心はもう峰斗の物やけん」

「じゃあやるからな？止めるならいまだぞ？」

「ちよつと待ってもう一回キスしよ？さっき私が無理やりしちやつたから次は峰斗からしてほしか」

「わかつたじゃあやるからな？」

どんどん近づいて行く峰斗と春の唇そして距離が零になったとき完全に二人の理性は崩壊してどんどん激しいキスになり互いを求めながら夜はふけていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5290z/>

---

スイッチ×2=大変です...

2012年1月12日00時45分発行